



地域の底力

奥会津

奥会津書房を 訪ねて

福島県大沼郡三島町
おおぬま みしま

東京から電車を乗り継いで五時間。
山また山の土地、奥会津に女性たちだけで
運営される小さな出版集団がある。
高い質と志を持つ本が、ここから何冊も誕生している。
未来を担う子供たちのために静かに燃やされる火をたどった。



奥会津書房は総勢4名の女性集団である。
左から渡部和さん、遠藤さん、中丸恵美子さん、武藤弘子さん。



とんがり屋根が可愛い奥会津書房。もともとは温泉施設だった。取材に出かけた1月は例年豪雪が続くが、今年はいちだんと深い雪に埋もれていた。

日本でいちばん 山奥にある 出版社

一月末の奥会津は、まだ豪雪の中にあつた。例年この時期には深い雪が積もるものだけれど、昨年来の記録的な豪雪は、日本海や太平洋から遠くはなれた山間の地に、例年にも増してたくさん雪を降らせていた。会津若松から乗り換えた只見線は、雪崩の恐れがあるため途中からバスによる代行輸送となつた。東京を出発しておよそ五時間、目的地の三島町の最寄り駅会津宮下でバスを降りる。五分ほどで、奥会津書房代表の遠藤由美

子さんが、いつもの筒袖のきものともんぺ姿で車を運転し、迎えにきてくださった。

めざす奥会津書房は、おそらく日本でもっとも山奥にある出版社である。社は、もとは町の温泉が廃業したあと、

奥会津書房のオフィスとして貸し出されたものである。とんがり屋根がかわいいが、雪下ろしをした直後だということで、まわりは屋根まで届く雪に覆われていた。中に入ると、昼でも暗い。あちこちに「危険」と書いた紙が貼られている床は、穴があいているのだという。スタッフは女性が四名、プラス雌猫のハナ。

奥会津書房は法人格ではないので、正確には出版集団ともいふべきだろうか。代表の遠藤



奥会津書房の編集長を務める遠藤由美子さん。愛猫ハナもメス。奥会津書房は全員女性である。ハナの定位置はお気に入りのパソコンの上(左)

さんは三島町の曹洞宗の寺院・西隆寺に生まれ、いちどは都会で働いた。遠藤さんがふるさとへ帰ってきたのは平成五年のことだった。

「私が育った頃の教育は、『外に出ろ』というものでした。郡山こおりやまの短大を出て、東京や横浜でフリーライターとして働き、ずっとそこからふるさとを見てきたのです。でも外から自分のふるさとを、田舎いなかとしてみていたとき、こちらに帰ってきたと

きでは見え方が違いますね。都会にいたときは、常に郷里の暮らしなどに対する郷愁がありました。こちらに戻ってから

は、郷愁などというものではないと理解するよつになりました。遠藤さんがふるさとに戻るきっかけは、三島町に隣接する昭和村の「からむし」振興に関わってくれという依頼があったことだった。今では「からむし」





昭和村特産のからむし織り。蝉の羽のような薄い着物は風を軽やかに通し、夏の装いとして愛されてきた(上)、からむしの繊維を手作業で取り出し、糸に紡いでいく(右)。(写真提供：奥会津書房)



と聞いても、ぴんとこない人のほうが多数派だろう。蝉の羽よりも薄い夏の着物の最高級品、「越後上布」の材料となる植物が昭和村のからむしである。細長い茎(一〜二メートルぐらいに育ったところを収穫する)から細い繊維をとり、それを紡いだ糸を織って反物や帯にするのである。今は新潟県でも糸を紡ぐ人や織り手が少なくなり、価格は高くなる一方である。高いものは一〇〇〇万円を超す。

「昭和村のからむしは昔からその多くが越後に運ばれ、越後上

布の供給元になっていました。私に話があったころも、原料の供給地でありながらそれだけではどうしようもないので、織物も生産しようと試みていたのです。その頃織られていたのはつるつるした、機械で紡績したような手触りのものでした」

初めてつるつるした反物を見

せられたとき、遠藤さんに蘇るものがあつた。初めて見るからむし織だったのに、自分が以前からむし織を身につけていたという記憶。また、当時はこんな織物ではなかったという違和感。「おかしいですよ。そのとき蘇ったのは、私が前世に生きていたとして、そのころに身につけていた織物の記憶だったように思うのです。こんなにつるつるしたものじゃない、もっとざっくりしていたはずだ、という確信もあつて」

不思議な記憶にいざなわれて三島町に戻り、車で一時間かかる昭和村に通い始めた。からむしが生まれた背景を調べたり、かかわってきた皆さんの技術者に出会うようになって、自分が生まれ育った地域の基層文化のすこさ、深さを痛感するようになったという。からむしの栽培者、繊維をとる人、糸を紡ぐ人、機織りをする人……。からむし織が出来上がるまでに、実にさまざまな人々の工夫や努力があつた。だが、ここでも後継者不足は深刻だった。

都会からきた女性たちが価値を発見

昭和村は、後継者育成の手段として「織姫候補生」を募集した。主に都会から、何人もの女性たちが昭和村に住み着き、技術を身につけようと研修を受けた。今では織姫も二期生を数える。奥会津書房のスタッフ、渡部和さんは一期生の一人である。一期生はみな、からむし織を手がける家にホームステイのかたちで同居した。そうだけでなくも高齢者の多い昭和村に、若い女性たちがやってきたのだ。しかも、地元文化に強い関心を持ち、高齢者の話に尊敬の念を持ちつつ耳を傾けてくれるのである。当時の村はどれほど明るくなったことが。

「一期生の人たちは、技術者の人たちの情動的なことも含めて、もつとも深い理解者になってくれたんです。これが昭和の伝統だ何だという前に、足元の基層文化がじいちゃんばあちゃんの暮らしの中しっかりあるとい

三島町内にある寺院はすっかり雪に埋もれていた。
高齢化が進む奥会津では冬を乗り越えるのも大変な苦労が伴う。



うことを、織姫さんたちがわかつてくれた。でも、それまで地元の人間がわかつていたわけではないですね」

きもの世界を知る人が驚くのは、実際にきもの作りにならずさわっている職人さんたちの、評価や待遇の驚くべき低さである。いったいどこに消費者が支払ったお金が消えていくのか。機織りの従事者を低く見る傾向は、地元の人々にもあったという。だが、都会から来た織姫は違った。渡部さんがお世話になったのは、当時六〇代の夫婦の家だった。「お父さんがからむしの栽培を

していて、お母さんが織っている。もともとは板金屋さんでしたが、畑はやる、きのこもとるという暮らしをずっとしていた方たちです。私たちのような都会の人間はすれからしなんでしょうね、本当に。最初は、私たちがからむしをやりきたんだから、それ以外のことは関係ないというレベルだったと思います。でもそれぞれの家で一緒に御飯を食べ、季節ごとの行事などを一緒にやつたりしているうちに、村のいろんな決まりごとや村の文化を肌で感じるようになっていきました（渡部さん）

昭和村や三島町など奥会津では、今も行事を丁寧に行う家が多い。夏に訪ねたときは、家々の玄関には端午の節句のときにさしこまれたヨモギや菖蒲が枯れて残っているし、お盆の迎え火や送り火をたいたあともあった。都会では失われた行事やそれに伴う記憶が、現実のものとしてなんとか生きています。

高齢者が守り伝える文化に尊敬の気持ちを抱く織姫が地元の青年と結婚し、定着する例も増

えてきた。嫁不足に悩む自治体は、きつと「織姫制度」をうらやんでいることだろう。

遠藤さんも、からむし織の仕事を手がけるようになり、ときには矛盾に悩みながらも、技術者の人々の言葉にめざめ、ふるさとを見る新たな視点を獲得することができた。帰郷を決めた時点では、そこまで思いは至らなかったはずである。

誰にも頼らず 自分たちで 出版事業をスタート

遠藤さんが出版の仕事を開始したのは偶然の産物だった。

「当時朝日新聞福島県版に、三

島町の人が『奥会津の歳時記』という連載を書いていらしたんです。これを残したいと思って、役場に提案してみたのですが、反応は『なんで本なんか作るんだ？』でした（笑）。それなら自分たちで作るしかないと思って、知り合いに相談してみました。

すると、『自分たちで編集して、自分たちでやりなさいよ。そうしたら安くできるから』と。その言葉を聴き、どこにも頼らず、自分たちでやるしかないかと思うようになったのです。一年ぐらい準備に時間をかけていたのですが、その間に県に話が聞こえたのか、地域づくりサポート事業の予算から助成をつけていただきました」

その話を聞きつけたいろいろな人が手を差し伸べてくれた。あるカメラマンは長年撮り続けていた奥会津の写真のポジフィルムをどっさり届け、使ってくれと申し出た。地域の人々、特に高齢者に話を聞き、原稿をまとめていくのは遠藤さんたちの仕事である。

最初の三年で生まれた本は、



厳寒となる冬季には、民家の軒下に大根を吊り下げ、「凍み大根」が作られる。同じく餅も凍らせて保存食となる。どこか懐かしさを感じる冬の風物詩。

奥会津書房の出版物。
奥会津書房ホームページ
<http://kyoritsu.co.jp/Okuaizu-syobou/>



いずれも見事な出来栄である。『BOON 文化シリーズ』は『奥会津 自然からの伝言』『奥会津 森に育まれた手仕事』『奥会津 神々との物語』『奥会津 縄文の響き』『奥会津 生きる』の五冊。縄文以来の採集の歴史を静かに受け継ぎ、山や森の声を聴き、自分たちの知恵を知恵とも思わずに生きてきた人々の姿が、美しい写真とともに立ち上がってくる。何より、これら

の本が、日本一山奥にある出版社から誕生したことがすばらしい。沖縄学者の伊波普猷が「汝の足元を深く掘れ。そこに泉あり」と語った言葉が思い出された。

もともと、立派な本ができたからといって儲かるほど出版事業は甘くない。

「最初、お金の出る三年間は役員会みたいな組織でやってきましたが、その後建設的に会を解体して、私たちがいわばセミプロ集団となり、収益を上げつつ仕事をしていきますと宣言しました。とはいえ、一年に一冊もできない年があつて、そのときは悲しかったですね」

地方出版社ですぐれた事業を展開しているところはたくさんあるが、流通の問題もあり、自立にはたくさんの課題を抱えている。遠藤さんは実家の西隆寺に住んでいるし、渡部さんも三島町の男性と結婚して両親と同じ居している。変な言い方になるが、都会で暮らすよりは多少楽かもしれないので、なんとかやっていける。ほかのスタッフも状況は似ている。事業として考



奥会津書房はその後、「BOON ふるさとシリーズ」の第一巻として『奥会津 蘇る記憶』などを出版。委託された仕事も続け、地に足の着いた活動を行ってきた。そして、昨年また転

「地域学」の担い手としても活動

えるのは無理があるだろう。だが、町や地域全体の資産として考えれば話は違つた。

失われる一方の地域の習慣や民俗。大切な言い伝え。高齢者の知恵。それを、未来を担う子供たちにしっかりと受け継ぐことができたなら。お金に換えられない価値がそこにあるのはいうまでもないが、新しい何かが生まれる可能性もはらんでいるのではないか。



雪かきに追われる遠藤さん。西隆寺の境内にある立派な山門も、赤い帽子と前垂れ姿のお地藏さんも雪の中。

機を迎えた。『会津学』を創刊したのである。東北芸術工科大学東北文化研究センター所長の赤坂憲雄教授（民俗学）が数年来提唱してきた「東北学」の考え方に共鳴し、平成十六年十月、奥会津の有志が集まって「会津学研究会」を発足。月に一度、奥会津書房に集まって勉強会を開いている。ときには、福島県立博物館長を兼務する赤坂氏も加わる。赤坂氏は、日本列島全体をひとつの歴史でくくるのではなく、「東北学」に代表される「地域学」が地元の人々によって



えんどう・ゆみこ
1949年三島町生まれ。郡山女子短期大学卒業後上京し、フリーライターとして活動。その後ふるさとに戻り、昭和村の「からむし織」の振興に携わる。その活動を通じて、奥会津に受け継がれる文化の深さを痛感し、出版事業を手がける。書籍の出版のほか、会津学研究会事務局として『会津学』出版や「会津学ゼミナール」の運営を行っている。

展開されていき、「いくつもの日本」が花開くことを願ってきた。読者にも覚えがあるだろう。隣の県でも文化や民俗が違う。いや、県内でも海側、盆地、山側ではいろいろなことが違う。藩政時代の記憶を引きずっている土地も多い。

それなら、それぞれの地域学を育てようというのが赤坂氏の発想である。それに共鳴した人々が、「津軽学」「盛岡学」「仙台学」「村山学」などの活動を始め、昨年一斉に機関誌を創刊した。遠藤さんたちも昨年夏に創刊号を出版し、遠藤さんの実家である西隆寺を主な会場として「第一回 会津学ゼミナール」を開催した。二泊三日の合宿形式

で、本堂を会場に赤坂氏や近畿大学民俗研究所所長の野本寛一氏ら、多彩なパネラーが参加したディスカッションやフィールドワークが行われた。蝉しぐれの境内で行われた議論、突然の夕立の中で敢行された現代舞踊など、忘れがたい印象を残した。

地域の人たちが集まって勉強会を続け、その成果を機関誌に発表する。年に一回はゼミナールを行う。この活動から、また新しい書き手や活動が生まれていくかもしれない。現に、渡部さんが創刊号に執筆した「渡部家の歳時記」は見事なものだった。義理の父母が守ってきたさまざまな行事を、発表するあてもなく記録してきたことが役立つたのである。それを読むと、奥会津の豊かさ、言葉にならない言葉の深さを感じられる。都会议中心、東京中心、「〜中心」という発想のくびきを逃れる大切さを痛感せずにはいられない。

『会津学』は年に一冊ずつ、必ず発行するつもりです。ゼミナールも続けますよ。ほかに『今、イザベラ・バードの『会津紀行』、尾瀬の草花の文庫シリーズなどを進めています』

「『会津学』には賞賛、反発、いろいろな反応があった。会津若松ではやはり藩政時代の歴史研究が中心となる。『会津学』というけど、あれは奥会津学だろ」という声がないわけではない。

「それに、赤坂さんが提唱された地域学という考え方が広がっているんです。特に、既に認識されている文化、歴史、風土を地域資源として、それを直接地域活性化、つまり経済にどうすれば結びつけられるかという流れが多いような気がしますね。そういう人たちから見れば、私たちの『会津学』は悠長すぎるかも

「しれません（笑）」

それを遠藤さんが嘆いているわけではない。それぞれの立場でできることをやる。子供たちに伝える。それが自分たちの責任だと考えているのだろう。奥会津書房が自主企画で発行する本には、奥付にこんな文章が掲載されている。

「本日のものが見えにくくなった今
何を私たちは為すべきだろうか
調和の中にあつた幼き魂は
どこへ行こうとしているのか
まだ、きつと間に合う
失つた時の彼方に
子供たちが歩く遠い未来に
変わらぬ確かなあかりがあると
信じる
たくさん願いと、たくさん力強い手で
切り立つ崖を歩こうとする子どもたちの
その足元を照らそう

取材から三カ月後。奥会津は桜とカタクリが満開になる季節を迎える。